園長だより NO１１９

2025.12.4

子どもの主体を支える大人の戸惑い

子ども主体、主体性を大切に育んでいこうと言われ、はや数十年、保育者中心主義の保育内容から脱却し子どもの声を聞き、子どもの声を尊重した子どもを中心にすえた保育が緩やかに広がってきている。

昔、大昔ではないが幼児教育（保育）は大人の意図、考えでその内容が決められている傾向が強かった。　計画（プラン）と言われ 今、現在の子どもの姿、発達から　この時期には〇〇を取り組ませてみようと計画を練っていた。　ある程度、子どもの事を考えて計画を立案するが　なにせ計画です。寸分たがわぬ手順、展開があり、その計画通りに活動を進めようとすることに主眼がおかれてしまう。

例えば折紙を例にあげるなら、折り紙指導として計画が考えられる。　夏だからセミを折りましょう。　黒板には　折り方の工程が細かく説明されている。　もちろん先生も大きな紙をつかい順序良く子どもに教えていく。ただ、このクラスが３５人程いたならそれぞれの理解度は異なる、スムーズに折れない子、先生の話していることが十分理解できない子、少々、不器用な子、そもそも折り紙に興味をもっていない子、　いろいろといるわけであるが　計画は手順を理解し折り、完成させることにねらいが置かれている。与えられた時間で完成までもっていかなくてはならない。　個別対応、それぞれの状況に応じた対応など希薄になる。そんな保育内容から子ども主体の姿など見られるどころではない。

私も幼稚園教諭になりたての頃はこんな保育をしていた。「子どもにとって何が楽しいのだろうか」「子どもにとって何が養われているのか」　子どもの声が遮断された活動に数年は違和感を感じていた。

これが幼児教育？　子どもの思いはどこに？　気づきはどこに？　やりたいな　やってみたい、こどもの探求心もそがれていた保育、　こんな保育をしている園は多く存在していた、　現在も多く存在しているだろう、ただ、時代の変化で、保育内容を見直し、子どもに寄り添った、主体性を保証しようとする園が増えてきているのも確かなことです。

先にあげたような保育からの脱却に取り組んでいる保育士、保育士中心主義といわれ、教えたがり屋集団が変化するにあたり多くの戸惑いが生まれる。

子どもの主体を保証しよう　思いを実現させてあげようとする中で　どこまで子どもの思いや要求に寄り添ってあげればいいのだろうか　　子どもはいたって大人と正反対、思いもよらぬことをする、危険なこともする、　汚すことも多いにする。　大人から見れば本当に手のかかる存在である。　だから、そんな行動行為を受け入れられない大人は大人目線でのルールを決めて子どもを管理するようになってしまった。　子どもの本業である遊びも思う存分やらせることもない、　きれいにスマートに大人の都合のタイムスケジュールで管理されていく。　管理されて育った子にはその子、自らの思いや考えで行動を起こす姿は顕著にみられない。　言われたからやる。指示を受けたからやる、　園生活で子どもの「先生、おトイレいっていいですか」の言葉に大人が中心の姿が写し出されていく。生理的なことまでも大人が支配している印象を受ける。

ついこないだ　４歳の孫が幼稚園でおしっこを漏らしたことを話してくれた、事情をきくと「先生がおはなししていたから、行ってはだめだと思った」「我慢しなくちゃと思った」という、今は発表会で忙しいといっていた。

言い出せない雰囲気もあったのだろうが幸い、補助担任が丁寧にケアをしてくれておもらしも笑い話になった。

どこまで子どもの思いや要求により添ってあげればいいのだろうかの戸惑い、その背景には子どもには思う存分、やりたいことを夢中に没頭して取り組んでもらいたいと思う願いがある。ただ、保育園は集団での生活の場であるという考えがあり、やりたいから何でもありとはいかないと思う場面が出てくる。

保育士、それぞれの保育観、価値観があり多様な考えが生まれてくる。またその背景に子どもの安全をどう担保するのかという考えも存在する。　子どもは大人と正反対の行動をとることはしばしばある。木登りにしても、高いところからのダイブなどもひやひやする場面に出会う。　子どもの主体を保証しようとするとなんでもやらせたいと思うだろうが「それって自由、放任、秩序がないのでは」と理解できない派から疑問が湧き出る。

子どもがやっているので見守っていますと単なる見守り役に徹してしまう保育士もいる。本来は子ども主体の保育を支える大人として見守ることは大切なこと、ただ見守ることは子どもの主体を支える方法の一つとして考える必要がありそれがいつも優先ではない。

子ども主体　主体性を支えていくことは簡単なことではない、　大人が考えた保育内容をおろし、教えていくことより数倍も難しい（とてもやりがいはある）ことに昨今の保育は舵を切る、子ども理解に努め、子どもの声を聴き暮らしを作っています。

ただその方法や具体的対応にマニュアルは存在しない。「今日〇〇君こんなことやっていたよ。　ひやひやしたけど　子どもに任せてみたらなんとかやりきっちゃったよ」などそれぞれのケースにかかわる大人が心を寄せ、どうかかかわり、子どもを支えているのか、日々の振り返りや情報共有、共に考える保育士の存在があり適正なかかわりがなされていく。　終着駅はなく延々と子どもに向き合い声をきき、よりよい環境をつくるのが保育、継続から子どもの育ちが保証されていくのです。

（おおぞら保育園長　廣部信隆　）